

随 想

★韓国とび歩き

コスモスの花

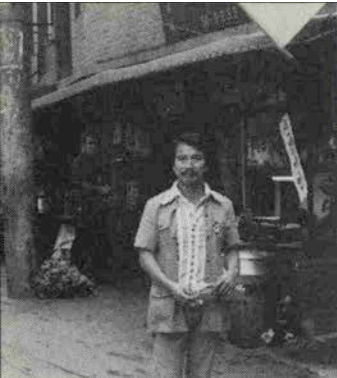
さわやか

田 磨 新

△作家△

九月二四日、大阪空港からコリア四日間の旅。快晴。ところがプサンは雨。プサンから慶州へ。雨しぶきの高速道をひと走り。

翌日も梅雨をおもわせる冷たい雨。キョンジュ東急ホテルの窓からうらめしそうに溜息をつく。眼



韓国にて 筆者



カット／中西 勝

の前は広い人工の池があつて霧も深い。岸の柳並木が風にふくらむ。

昨夜はツアーつきのキーセン料理。美しく着飾ったコリア娘とそれぞれに食卓を囲む。なごやかそのうなスタートだが、外交官を自負する彼女たちは何とかホテルインの約束を取付けたらしい。そんな気でない私など断るのに難儀してしまう。商談は決裂。

二五日は慶州めぐり。新羅時代の仏国寺、掛陵、新羅焼窯場。午後は王陵の古墳跡から博物館とカジノ。私の心は村や町の風景に捉われていく。眺めるもの、ふりかえるもの、すべて初めてなのに、いつか見た、歩いた風景と重なって、いよいよ窓から顔が離せない。チネパールの農村にも似ている。チベットやシルクロードの果てに通じる何かがあつて（掛陵の石像な

ど）やはりここは大陸・朝鮮半島なのだとな得させる。

幹線道路の両側は、いまを盛りのコスモスの花ざかり。可憐で根強い花の群れが、行けども行けどもバス道に連なっている。雨にぬれ風にそよいでも、ささやくばかりのりりしさ。紅のサルビア、黄色いポンポンダリアも。コスモスの花は川原や山のふもとにも咲き乱れ、種を空からでもまくのだからかとガイドに訊いてみると、ちゃんと植えているという。なるほど川岸の群れは畝のようにもみられる。

このコスモスの道は、翌日のソウルへの道にも、さらにその北三〇数キロの板門店の道路にまでつづき、この旅いちばんの収穫だった。花を愛でる人々がそこに住み、花のいのちとともに暮らす心の豊かさを見る思いがしてくる。コスモスの道をひたすらバスは走りつづける。

農村は新しい村づくりがすすんでいて、古い藁屋根は影をひそめ、新しい色瓦屋根の両翼がちよっと空にそって（オキナワ風の家屋にも似ている）モダンなレンガ造りの二階建てや、またその上に上屋を建てたり、走り去る風景は清すがいい。

小川ではおかみたちの砦で打つ洗濯風景、頭の上に大きな籠かごをの

せ、泳ぐような足どりの女たち：私が探し求めていた心象風景は残っていた。

ソウルは八百万人の大都市で、いま市街地は南へ北へと広がり、中心部はあちこちで地下鉄工事中のある街並みは、おもむきもあるが都市のもつ混沌は大阪も神戸も同じ。東大門近くの市場、裏街を歩く。路上市場はバンコック、ホンコンに通じ働きもののおかみたちが主だ。

二七日は板門店へ。北へ通じる鉄道も道路も切断され、コスモスの花もさびしそう。平和のまま南北の交流を願わずにはおれない気持になる。高麗青磁の利川、李朝白磁の広州へは、また次の機会にとあわただししい旅に別れを惜しむつつ。アンニョン テーダニカム サハムニダ。

秋の

北京情緒

木村 憲吾

△朝の畫▽

九月中旬から十月中旬までのわずかな間が「燕京の秋」といわれ、抜けるような青い高い空、澄みきった空気。この頃、鴨子に脂がのって、ネギがシュンになる。人も食欲の秋、正に天下の美味、北京ダック「日々是好日」新栗、リン



故宮にて 筆者

ことはなかった。アセチリン瓦斯のニホイも光も今はない。四〇年前のニコマを思い出しながら天壇に向う。天壇公園の松柏の樹々も四〇年前と変わっていない。これらの樹

ゴ、梨、白菜が街に出廻り、永い冬に入る前の最高の季節だ。郊外から市内に向って並木に包まれた幾本もの道路が直線に走って杜の都北京の手足になり厚みを成している。道路沿いに新しいビルが着実に構築されつつある。

街中、自転車の洪水で三百万台というすごい量の自転車王国の街。ガソリン臭の無い珍しい大都市北京は空気が綺麗。赤と黄の建造物が冴えて美しい。故宮、明の十三陵、頤和園、万里の長城など名所旧跡は保存が実に行届いて完璧だ。紫禁城造築の時、瓦を焼いた跡が琉璃廠の名称で骨董街として知られた一劃だが、ただ今取壊しの最中で、二〇〇軒近い老舗が競いあつた往時の盛況がどう再現されるのか期待されているところの一つだ。

夜明け前、ねぼけ眼で前門外天橋市場をきよろきよろ歩き廻って英国製銀台の立派な望遠鏡を掘り出したのもやはり秋だった。非常に好くみえ、味をしめて再三通ったが、其後目覚しいものに出会う

令は六百年位経ているとか。ただかだか四〇年の歳月では大した差がないらしい。悠々たる歴史の流れを感じる。定陵の地下三〇米の地下にある、祭壇に飾られた明代初期の一对の大壺が窯から出たままの初の見事さに驚き、撮影禁止のため、残念ながら我が記憶に留めるのみ。とにかく未だお目にかかったことのない完品だった。

出来れば、北京に二三月月滞在し、自転車でゆっくり見物するのが理想。そして大衆食堂の騒音の中で食事をしたら素晴らしい。王府井の菓子店で喰べた点心の旨さとフンイキのよかつたこと。豚一匹料理したらおしまいにする店は楽しかった。時間に依つて、足、鼻、耳、内臓と何が出るか面白い食べ物屋だった。その御店も誰に尋ねても知る人は居ない。前門外の雑路の中にある采館に初めて北京へ旅した時、「メニユ」を径に上から注文した。ところが出るはスー、スー、又スーで中華料理の注文は横にすることをその時知った。

北京市内至るところ防空壕が設営され、一部は観光用にしているが、私には無用と遂に行かず、もっぱらほつつき歩き専門。毎日ホテルへ帰ることが惜しくて遂々遅れてばかり。夜更けて胡同の家々からもれる淡い光に影を引く物売の声、胡弓の音。北京のしみじみとした情緒はそこそこにあるんです。

Don't smoke に

おったまげ

中西 勝

△画家・二紀会兵庫支部長△

シンガポール日本友好協会から招きを受け、六甲ライオンズクラブや神戸輸入促進フォーラムの協力を得て、神戸二紀が九月五日〜十日までシンガポール「第十一回日本文化節」に参加という突然降ってわいたような話。

シンガポールに行くというと、会う人ごとに「あそこはきれいですよ」と聞かされたが、私はきれいな所が嫌いなため、旅行として

の興味は全く感じていなかった。

ところがチャンギー空港に着くなり、その規模の大きさにびっくり。ホテルで一夜明かした後、窓の外を眺め、想像していた美しさと全く違う美しさに感嘆した。まさに公園都市国家。ゆとりのある緑したたる中に機能美だけでなく、芸術性、民族性のあるフォルムが感じられる建築物があり、ほっと一息。樹にしても日本のように何とか生きながらえている感じでなく、潑刺としてふくよかで咲き誇っているという印象を受けた。

旅先の印象を言葉で他人に伝達する難しさをつくづく感じた。

一番驚いたのは、ホテルから出て女房が先に乗ったタクシーにくわえたばこで乗りこもうとしたとたん、「Don't smoke」とばかりでつかい声。あわやたばこを落っことしそうになって、いったいだれだと思い、まわりを見回すとタクシーの運転ちゃんの恐い顔。あわてて、ホテルへ灰皿を探しに逆戻り。あんな大きな声で怒鳴られたのは、戦後初めてのことだった。

それほど市中では、タバコのポイ捨てに厳しく、罰金もとられるほどののに、いったんアラブ街やインド人街などのそりやもうきたない所へ行くと、たばこの捨て場は溝の中で皆いっせいに「ほれ、ほれ」とけしかける。こっちはま

た怒鳴られるんじゃないかと警戒しながらほったら、田舎者やなどという感じでニヤニヤしている。

近代化を進めようとするシンガポールの姿勢の陰で取り残された地域が、ほんの目と鼻の先で進行しているといった感じだ。

絵を描く者として街でおもしろいと思ったのは、舗道につき出した家の屋根、その道のまん中に見えるサルタンモスク教会の丸い屋根がピカツと光っているのは素晴らしい、創作意欲をそそられた。壁は全体に淡いパステル調。いぼいぼのあるくだもの、ゴボゴボとした樹、まさに最高の条件で育ったという感じだ。道端で写生しているも、低開発国の場合人がいっぱい集まってきて大よそ描けたもんじやないんだが、そういう無作法な面は全くなかった。ある意味での常識、教養を持っているみたかった。

こちらは神戸サイドで出かけたのだが、シンガポールでは国家サイドでの応対を受け、心から歓迎してもらい、時には気恥しさを感じたほどだった。が、日本人の目指す海外の幅の広さは向こうにも感銘を与えたのではないだろうかこれを機に、今後も気楽な交流を願い、相互の展覧会出品の機会を多く持てたらと思う。



ジャカルタのスラバヤ通りにて中西夫妻

秋のノクターン

吉村 由美

〔随筆家〕
六甲ジイニヤス・カレッジ代表者

風のささやく白い坂道の街に、冷たさを加えた秋のさやめきが揺れて流れる。深まる季節は道ゆく人々によりそいながら、静かに、さかりの光彩を浮きたたせはじめの。白い石畳の並木路が続き、かすかに響く靴音も、行き交う人影のほほえむ目差しも、心暖かな思いの中を通りすぎる。街路樹の葉は、黄金色の旋律の中に舞い散り、やがて去ろうとするひと時の華やきを告げているのだが。

北野坂の並木をさやめかせる秋の光り、寂とした風のかそけさ。ピエール・ポルトのピアノが奏でる「ノクターン」が私の思惟の中を流れてゆく。「音の画家」とよばれるポルトの音楽は、ドラマ性よりはむしろ映像的な表現力を感じ

じさせるのだ。ロマン・ボランスキー監督の映画「テス」のテーマ音楽「哀しみのテス」も、あの霧におおわれたかのような、静寂にみちた画面の美しさを、美術監督のピエール・ガフロイとジャック・ステイブンスのすぐれた映像感覚とともに、ポルトの音楽は、画面構成をきわだたせる表現効果を持っていた。

リチャード・クレイダーマンのナイーヴな優美さ、カナダ出身のフランク・ミルズの都会的でかるやかな明るさ。そしてピエール・ポルトの音色には、風景の中にさやめき揺れる光りの透明感がある。それは自然が持つ、しなやかな生命力の美しい部分を、音楽家としての彼の感覚が心暖くとらえているからであらう。街角にたたずむ季節に、フランス郊外の林の道に、落葉の散るかそけさに、深まる空のはるかなる青さに、作曲家としての心に沸きおこる、楽想の契機が秘められているように思われる。

彼。彼の音楽は、その根源的な部分で、楽想にいざなう自然の風景を、音楽的世界の扉と

からあの旋律は奏でられはじめるのだ。ピエール・ポルトの「ノクターン」そして「黄金の嵐」に、秋のさかりの華やきと、寂々とした思いと、またさらにさわめく移行の時の、ダイナミックな自然の表象を感じる。時には海辺の波のきらめきを、またはるかに続く林の黄金色の樹々に映じる光彩を、そしてオーロラの多様な色調に変化する神秘的な光りによせて、きわめて絵画的な音楽の映像を描き出すのだ。

北野町の街は、たとえばユトリロの「白の時代」に描かれたモンマルトル風景や、教会の油彩画のような雰囲気を持つ一郭がある。しかしユトリロの絵の詩情と、深く沈んだ哀愁に最も近い風景をこの街が見せるのは、むしろ冬の暗色の季節なのだ。

秋のさやめく光彩にゆれる樹々の葉。異人館のよいい戸は開かれ、人々のさんざめきや、つたのからまる洋館の壁と散歩の小径にも、今年の秋の想いには、ピエール・ポルトのピアノが奏でる「ノクターン」の旋律が、ふさわしいのではないかと思ってみたりしている。



文芸誌「現」編集室

受験予備校

六甲ジイニヤス・

カレッジ本部

☎(078) 821・4666

神戸女学院高等部 ハンドベル

下田 閑子 神戸女学院中高級教諭

こよひなりわたる 鐘のひびきは
み子の生れたもうさちをつたうる
ともにつどう我らも声をあわせて
み子をほめたたえん
かねに合わせて

讃美歌 第二篇 一二一

西宮市岡田山にある神戸女学院では、この数年来、同校の父兄、近隣の方々を招いて午後六時三十分よりパイプオルガンのある講堂でクリスマス礼拝を守っている。

一九七九年からはオルガンの前奏につづきオーブニングのハンドベルの演奏をする事になった。メロディーは冒頭に書いたドイツのクリスマスカドルである。会衆の気分がおさまると音楽学部によるオラトリオの演奏がある。その後



選択授業でハンドベルを学ぶ高3の生徒達

もう一度、ハンドベルの次の曲がなり響くが、この所がこの夜の最高潮の時であろう。会衆はその美しさに興奮しているようだ。

私が初めてハンドベル演奏をきいたのは十四年前、京都同志社女子高校主催のクリスマス礼拝を訪れた時であった。「栄光館」の二階で白いガウンを着た七名の乙女達の打つベルの響きは今も忘れる事の出来ない感動的なものであった。それから十年後、はからずも日本ハンドベル連盟主催する夏期講習会に参加する事が出来、その年の秋にはハンドベルの三オクターヴを備え、まず最初の試みとして高三音楽選択の授業にとり入れ、現在に至っている。

さて、普通ハンドベルと呼んでいるものは、正しくは、イングリッシュ・ハンドベルの事である。鐘の部分は銅と錫の合金で铸造され、その割合は80%対20%で、それが、最も美しい音色を出すといわれている。鐘を鳴らす「振子」は一方にだけ往復するようになっていて、振る度に一度だけ鳴るようにスプリングで調節してある。ハンドベルは十六世紀にイギリ

スの教会で生まれ、後タワーベルの練習用に考案されたが、タワーのためばかりでなく、メロディーやハーモニーをつけられる位ベルの数を増し、テクニックを改良した。一九二三年にはボストンで、ハンドベルのグループが出来、一九五四年にはアメリカの連盟、一九六七年にはイギリスで、又、日本では一九七六年に世界第三番目の連盟が誕生した。

ベルの表面はデリケートな肌をもっていて、指紋がつき易く、そこからさびになるので、必ず木綿の手袋をつけ慎重にとり扱わなければならない。又振り方はベルの大小の差はあれ、トレモロ、ビブラート、スウィング等いろいろ工夫をすることが出来る。

メンバーは十人位が適当で、一人で二個から五個位のベルを受け持ち、曲の速さと、リズムにより、持ち替えながら音を続ける。

最後に私のささやかな感想として、ハンドベルの練習によって、共に労し、責任、協力、忍耐と優しさを学び、人と人とのふれあいを知るならば、このユニークな楽器を演奏する本当の価値があると思っている。

きよき鐘の音は 遠く流れて
み子はやすらかに 眠りたまえり

(冒頭の二節)

神戸女学院高等部/西宮市岡田山四一
0798(52)0955

□連載エッセイ／私のひろいもの△34▽

月明りの下

竹中

郁△詩人・絵も▽



むかし、大正の初期のころ、生田神社と湊川神社の境内に大砲がおいてあった。乾いた梅ぼし色のペンキ塗りの図体は相当大きかった。

いま、元町六丁目の三越の西の路面に蒸汽機関車がおいてある。あれくらいの大きさは十分にあった。なぜ平和で清浄であるべき神社の境内に、日露戦争で使いふるした大砲みたいなものを置いたのか。たぶん、当時、水ぶくれにふくれつつあった日本の軍国主義の現象の一つとして、神社側も民衆側もそれをいぶかったり憤ったりしなかったのだ。

さて、同じ時期に神戸の元居留地の江戸町の四つ角に大砲がおいてあった。今の高砂商街の北にあたる小さな空地に、周りを垣根でかこんで小さ

な庭のような風情。両輪の高さも一米くらい的小りりしい砲車に砲身がのせてあった。砲身の長さは二米あるかなし。さきの神社のとくらべると大人と子供どころではなかった。

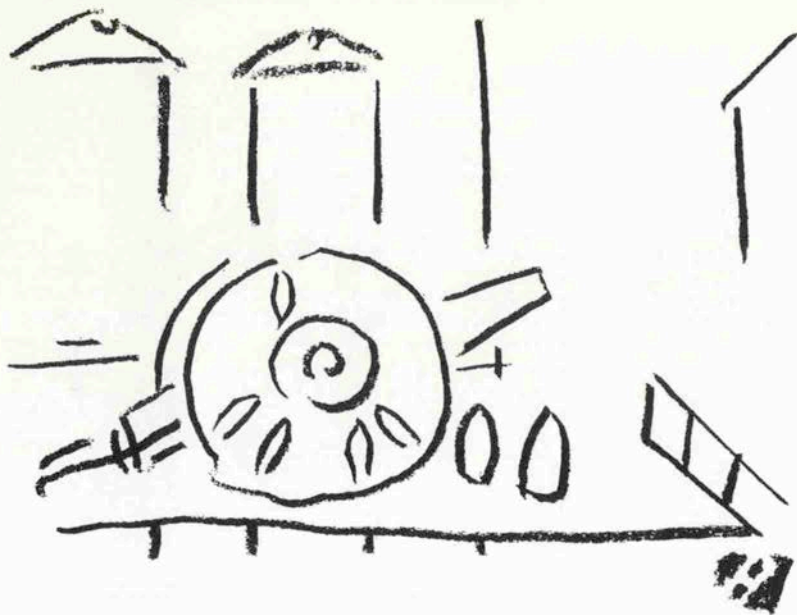
町角のかざりに置くにふさわしい姿かたちをしていた。いったい誰の仕業か。たぶん、その建物に入っていたイギリス商館の主の思いつきからにちがいない。

そのイギリス人は日本軍国主義が足音あらく世界をさがせるのをたしなめたく、皮肉とユーモアとの入りまじった玩具のような大砲を町角にかざることでは表現したのではないかしら。

この小さな大砲はいつみても掃除がゆきとどいていて小気味のよい姿であった。それに引きかえ、二つの神社の方の方は保存がほったらかしで、その

形が臼のような重くるしい上に、熱意のない保管で見苦しい不ざまぶりであった。

大砲というような造形物をオブジェとして町中の人間生活の中に引き入れるのはおもしろいことだ。すでに武器としてではないものにふさわしい雰囲気をかもし出す点に新しい価値がある。



元居留地を月夜にあるくと、その静かさと寂しさで一段と詩情を感じたものだ。そこへこの小さな古風な大砲。まるでナポレオン時代のヨーロッパの戦争の絵巻物の一部が加わるので、神戸の元居留地の中とは思えなくなる不思議な影を感じた。

現在、市役所のぐるりや大倉山のふもとには彫刻に依る環境造りが行われ、おのおのテーマに沿って作品が配されてゆきつつある。ひるまの光りにだけ浮び上らせるような方法だけではなく、月夜の効果も計算した作品群の一区画もあってよいように思える。

ポンペイやローマの古跡を月明りの下で歩いたことはないが、大正時代にこの居留地の小さな大砲をみた記憶は今でも至ってあざやかだ。

一人のイギリス商人が思いついた行為が何十年後になって私のあたまにはっきりとした映像をのこしていて、その砲車の姿をスケッチ帖に再現できる。

今日、その江戸町の角はただ路面の一部になっってしまったが、私はそこを通るたびに「まぼろしの砲車」を眼にうかべる。

まさか、そのイギリス人、これほどまでに一人の日本人のころ深くにまでもぐりこむ砲車とは思わなかっただろう。形や色彩が美しいというだけで、これだけ話に格差が生れてくる。見ぐるしいものと小凛々しいものの違いの行くすえを書きました。



連載エッセイ

折々の神戸〔Ⅷ〕

仔犬のいる風景

多田 智満子（詩人）
絵／石阪春生

この夏、飼犬のゴローがフィラリアで死んだ。
私の家のように庭が草ぼうぼうとして「草深い」
住居だと、どうしても蚊が多く、庭で飼ってい
る犬は蚊にさされ放題、したがって、蚊の媒介す
る寄生虫フィラリアは、ほとんど必然の運命のよ
うに犬の体内に巣くうことになる。

体力があるうちは時々咳をするくらいで病氣と
も見えないが、夏の暑さで食欲減退し、弱ったと
ころに風邪をひいたのがひきがねとなって、どっ
と病状が悪化した。最後の一週間は牛乳すら飲め
なくなり、かろうじて水だけ飲む、という状態で、
栄養注射で力をつけようとしたが、所詮回復の見
込みはなかった。

かわいそうなことをした、と、空っぽの犬小屋
を見ては家中さびしがつていた。なかでも夫は、

ひと月ほど前から、ひまさえあればデパートの犬
売場やペットショップをのぞいてあるいている様
子だったが、とうとう数日前、犬屋で柴犬の仔を
買ってきた。

生きものは死ぬからかわいそう、といって飼お
うとしない人があるけれども、本当の犬好き猫好
きになると、死んでも死んでも性こりもなく飼い
たがるものらしい。今年の六月頃の日本経済新聞
の文芸欄で、歌人の佐々木幸綱氏が中年女性の投
稿について書いておられる中で、こんな短歌が引
用されていた。

愛し来し猫のため泣きつつわが庭に
百五十六番目の墓を掘りたり

この歌は没にして選には入れなかったが、あま
りに印象が強烈だったので暗くらでおぼえている、と

いうような意味のことを佐々木氏は述べておられた。

たしかに百五十六番目の墓とはおそろしい数字である。庭じゅう猫の墓だらけ。にやんとも気味のわるい話だが、しかしこの女性にしてみれば、いとおしんだ猫を火葬場に送るにしのびず、自分の庭にほうむってやりたいのであろう。

百五十六匹もの猫をかわいがって育て、それだけの数の猫の死を見送った女性。彼女は泣きながら庭を掘って猫の屍骸を埋め、そしてまた性ころもなく別の猫を飼いつづけるのだらう。

犬や猫は寿命が短いから、その一生は私たちのずっとあとからはじまって、ずっと先に終る。

夏に死んだゴローは、うちの娘が小学三年生のとき、よちよち歩きの仔犬だった。そして娘が高校に入った今年、八歳にならぬうちにはやばやと死んだのである。人間ならば五十歳余りというところだろうか。犬の時間は迅速で、人間の持ち時間を足早に追いついて先に行ってしまう。いたいけな仔犬をふところに入れてかわいがるのも、立派に四肢の伸びた成犬を連れて裏山を散歩するのも、またあわれなその死をみとるのも、みな人間の生涯のなかの、心に残る折々の風景にちがいない。いくつかの犬の死を見送って、やがて自分自身の死を迎えるのだ。

ところで、私はこのところひどく忙しくて、しばらく犬は飼うまいと思っていた。どうせ飼うなら小さいうちから育てたいし、幼犬は何かと世話の焼けるものだから、とても時間がない、と思っていた。そこへ、夫が柴犬の仔をうれしそうにかかえて———といいたいがじつは仔犬を入れたダンボー

ル箱を車の助手席に積んで帰ってきたのである。かわいいだろう、と見せられて、うん、かわいい、と同意したのが運のつきだった。それでも、牝だというので私はかなり抵抗した。

———雑種の仔なんか生んだら困るじゃないの。

———大丈夫、犬屋がいい牡を紹介して貸してくれるそうだ。

———それにしても生れた仔をみんな育てるわけにいかないでしょ。

———大丈夫犬屋がちゃんとひきとるって。

———生ませてひきとらせるくらいなら、はじめから牡を飼う方が面倒がないのに。

———だって、仔が生れたらおもしろいじゃないか。小さいのが庭でころころしてさ。

———それじゃあなた世話しなさいよ。ずいぶん手間がかかるんだから。

———そりゃ、できるだけはするさ。でも昼間はいないからね。やっぱりあんたにやってもらわないと。

要するにこれが敵の本音なのだ。一たんうちに入れてしまえば、もう思う壺、ブツブツいいながらも私が世話を焼くことになるのを見通して、自分は「仔犬のいる風景」をのんびり楽しもうという魂胆である。一頭の牡犬だけならば、一年もすれば大人になってそれっきりだが、牝ならば次々仔を生む。愛くるしい仔犬たちが庭でふざけまわる情景を予想して彼は悦に入っているが、私の方は次々生まれる仔が迅速な生涯を了えて、「百五十六番目の墓を掘りたり」というようなことにならないようにと、今から対策に頭を悩ましている。

トランペット片手にブラジル一人歩き(ア)

緑色の顔をした〃息子〃

パパガイオの話

右近

雅夫(在ブラジル・サンパウロ/絵も)



トリニダッド・トバゴからの帰途、アマゾン河口のベレンで一週間ほど過ごし、まだ夜の明け切らぬベレン空港を国内線の双発機でサンパウロへ向けて出発した。離陸してしばらくすると天候がだんだん悪くなり、暴風雨になった。機体が激しく揺れ出し、いよいよ危いと思った時には、当時のプロペラ機ではもうベレンまで引き返すことも嵐の雲の上に出ることもできなかった。元戦闘機のパイロットだったという機長は、乗客に安全ベルトの着用を命じ、いつでも不時着できる体制で嵐の中を強行突破した。高度をうんと下げ、アマゾン河の支流の上ばかりを縫うようにして、恐らく水面から十メートル位の低空で飛んだのだと思う。窓から外を見ると、まるでバスで走っているように、突風に揺さぶられる川岸の椰子の木や土人の小屋などが、すいすいと機体の窓すれすれに走り過ぎて行くので、生きた心地がしなかった。

やっとゴヤス高原のポルト・ナシヨナルの飛行場に着陸した時には、風雨も割合おさまり、乗客一同胸を撫でおろした。そこは飛行場といっても、滑走路の脇に椰子の葉で葺いた小屋が一つあるだ

けで、土人の子供達が飛行機のすぐそばまでやって来て「おうむ」を売っていた。小さなのを「ピリキット」、大きいのを「アラアラ」というが、アラアラは海賊映画に良く出てくる赤や青の顔をしたでっかい奴で、嘴の大きさを見ただけでもうす気味が悪いので、僕は中位の「パパガイオ」を当時の百クルゼイロを支払って買った。

パパガイオは別名「ローロ」ともいうが、体全体が緑色をしていて、目の周囲が黄色く、羽のつけ根が少し赤いブラジル特産のおうむで、巧く教え込めば何でも喋るようになる。燃料の補給が終ると飛行機は再びサンパウロへ向けて飛び立ったが、大嵐は過ぎたものの、気流の状態は相変わらず悪く、途中で何度もエア・ポケットに落ち込んだ。そのたびに僕の腕にとまらせていたパパガイオは、羽をばたきたせながら床の上に放り出された。

サンパウロの家に帰ってきてからも、パパガイオはまるで二日酔いのようにあくびばかりし続け元気に餌を食べだすようになるまで二、三日もかかった。僕は早速古いほうきの柄で作ったとまり

木の上にパパガイオをとまらせ、「おはよう、おはよう」と繰り返していつていると、やっと頓狂な声を発して「ボン・ディア」といえるようになった。それからというものは、次から次へといろんな言葉を覚え、餌をやると必ず「有難度う」というし、当時流行していた「マラカンガリーヤ・エウ・ボウ」というサンバの一節まで歌うようになり、母や妹たちを驚かせた。

ところで、あの当時は二人の妹たちもまだ嫁に行っていないので、母の料理の手伝いができたのをいいことにして、僕は誕生日にはデキシの仲間やブラジル人のアミゴを招いては盛大にフェスタをやった。その日はちょうどジャズの好きな資本家のクラウデ・ブルム氏が僕の仕事に出資してやろうというので、一緒に招き、皆と食事していた最中であつた。急に誰かがけらけら笑いだしたかと思うと、ブルム氏が「あっちへ行け！」



と怒鳴り出したので、何事が起ったのかと彼の方を見ると、裏庭のとまり木にいた筈のパパガイオがブルム氏の肩の上にとまっていた。台所から食堂に入ってきて、椅子をよじ登って食事中的ブルム氏の肩の上にとまったのであろう。パパガイオは首を一ぱい伸して横合いからブルム氏のご馳走を失敬しようとしているところであつた。ユダヤ人特有のブルム氏のわし鼻が、パパガイオの鉤型をした嘴そっくりで、その光景を見て皆笑いこけてしまった。

パパガイオはなかなか悪賢い鳥で、ちよつと油断していると、とまり木からおりて、勝手に裏庭から台所や居間にまで入ってきて家具の足をかじったりするようになったので、父が怒って針金でできた鳥籠を買ってきて、その中へ閉じ込めてしまった。一時あんなに何でも喋って人を驚かせた我が家のパパガイオは、その時以来毎日ぎゃあすか鳴くばかりで、人間の言葉は余り喋らなくなってしまった。

それから十数年経って、僕はブラジル人の女性と結婚したのだが、まだ婚約当時、彼女を家に連れて行き、「実は僕には緑色の顔をした息子が一人いるんだが、僕等が結婚したら母の家にあずけて置こうかな……」と冗談のつもりでいったら、彼女はびっくりしてしまった。半信半疑の彼女を裏庭に連れて行き、久し振りに鳥籠からパパガイオを出してやると喜んで、「パイお元氣？ パイお元氣？」と喋り出した。「なるほど、彼が緑色の顔をした息子さんだったのね」というなり彼女はうれしそうに笑ったが、内心黄色い顔をした息子でなくてほっとしたことであらう。

★ ★ ★ 羽飾りが軽やかなショート ★ ★ ★
★ X'mas Party で踊りあかそう ★ ★ ★



デザイン/畑尾宇多子

〈本店〉ベル・ジュバンスの専門店
神戸・三宮神社北東三上ビル3F TEL.331-8894・4917

〈芦屋支店〉
芦屋・阪神芦屋駅山側 TEL.0797-22-4067

お貸衣裳部 東京初代遠藤波津子直流
花嫁衣裳サロン 畑尾美久子の店
本店美容室エリザベスの上 TEL 331-3258

専属結婚会場 生田神社会館/プラン・ドゥ・プラン/阪急六甲ホテル/蘇州園/海皇/北野クラブ他

株式会社 美容室

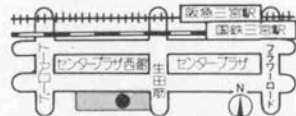
エリザベス

ファッションに
“贅”を尽くすのは素敵。
でも、
いつも美しく着ている
人はもっと素敵。



技術に贅を尽くしファッションを
常に美しく——ニジジマ

- 型ずれの防止 ●素材感の回復 ●カレテの作成
- お客さまのお好みに合せた仕上 ●ファッションクリエーティングの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
グレイス神戸B1 ☎ (078) 332-2440

ポートピア等が語る 神戸の文化

小林信次郎

(大阪工科大学、英語・アフリカ文学)

神戸はハイカラであり、ナウイ
だ。新しい文化をどしどし取り入
れて、それを榮養素にかえてしま
うが、ときには咀しやくを怠って
下痢を起すこともある。今年の神
戸の最大のトピックは神戸博であ
り、それに附随してポーツアイ、ポ
ートライナー、ポートピア等の神
戸製の英語のような言葉が生れた
が、これらはいかにも神戸的だ。
ポーツアイとは人工の港の島を表
すポートアイランドのトとランド
とを省略して生れた新語であろ
う。日本語の拍、換言すれば音節
の数は三拍から六拍が約95%で
その中でも三拍と四拍とが一番多

1,600万人の入場者を集め、ポートピアの名は全国に広まった

い。だからアバートメント・ハウ
スはアバートと後部を省略し、サ
ラリード・マンはサラリーマンと
中部の一拍を省いて外来語になっ
ている。しかしポーツアイのように
中部の文字も後部の文字も同時に
省略する外来語の造語法は珍らし
い。これほど短時に普及した例
は稀有かもしれない。これは一つ
にはポーツアイの拍も響きも良いか
らである。二つには神戸っ子のこ
とばに対するセンスの鋭さと、新
しいものに物おじしない気質があ
るからであろう。

ポートライナーも神戸的センス
に溢れている。ライナーとは英語
で定期船や航空機を意味するから
英米人にポートライナーと言えば
港巡りの遊覧船を連想されてしま
った。神戸大橋からポーツアイに延
びる高架の線路はさながら野球の
ライナーであり、低速で走る車窓
の眺めは遊覧船のそれであり、自
動運転の新しい列車であるから、
あえてポートライナーと命名され
たのであらうと説明すると、実状
にふさわしい神戸生れの英語だと
感心されたものである。神戸っ子
はフジヤマ、ゲイシャ、ワビ、サ
ビ以外に新技術を内包する新しい
語いを、英語にも加えそう、面
目躍如としている。

ポートピアは英語の port と
utopia との合成語であるから、
portopia と綴りポートウピアと
書き、読むときはウにアクセント
が来る。ところが博覧会協会はポ
スターにポートピアと大書してP
Rに余念がなかった。ゴダイゴも
博覧会賛歌でポートピアとトを
長音で歌ったのはさすがに外大出
身だと思わせたが、ピアを高く歌
っていた。英語でピアとは棧橋と
か突堤の意味でポートピアと言っ
ても大同小異である。事実神戸港
の突堤は英語でピアと表示されて
おり、京橋から博覧会に行く外国
人はピア3という表示を見てまご
ついたそうである。とは言うもの
のポートウピアと書くとは日本語の
平均的音節の数から一層遠くなる
うえに、音の響きも日本語になじ
みにくい。ポートピアの方が音節
の数も響きも良い。神戸っ子は内
容(意味)からかけ離れても響き
(体裁)の良い日本語になじむ外
来語標記を選んだことになる。

ポーツアイ、ポートライナー、ポ
ートピアの三語はハイカラだとも、
ナウイだともいわれる神戸の
精神風土、換言すれば文化の一端
を如実に示していると言えよう。

●対談 《世界の染付》全6巻刊行に寄せて

海のシルクロード 陶磁の世界

三杉 隆敏

〈小原流芸術参考館
副館長〉

VS

奈良本 辰也

〈歴史家〉

——このほど京都の同朋舎から『世界の染付』（全六巻）が刊行されることになりました。著者の三杉先生は、『海のシルクロード』の提唱者でもあり、昭和四十三年に『海のシルクロードを求めて』を出版されています。そこで今日は、歴史学者の奈良本先生と三杉先生とで、世

三杉 隆敏さん

界の陶磁器文化ということでお話をお願いいたします。

ベルシア人が中国に陶器をつくらせた

三杉 近頃は大変なシルクロード・ブームですね。しかし、絹が中国の特産品であったことはみなさん知っておられるのですが、千三百度の高温で磁土を焼いた磁器も中国の特産品で世界中の人たちがそれを手にしようと狂奔したことは忘れられている。それと重い焼き物をラクダの背でたくさん運べるわけがない。だから今一つの東西交易ルートである海をたどって船で運んだと推定し、その海上ルートを自分でたどったのが、『海のシルクロード』なのです。

奈良本 海のシルクロードという発想は面白いですね。何も陸路ばかりを通らなくても、海の方が、言ってみれば、もっと楽に来れるのだから、当然、海のシルクロードはあっていいですね。

陶芸家の加藤唐九郎から話を聞いたのだけど、陶器はベルシアが一番だと言うんですよ。つまり、シルクロードを通じて西へ行くほどよくなるんだと。ベルシアはい





奈良本 辰也さん

いよ、やっぱし、と言ってるんですよ。ベルシアからずつとシルクロードを通って来たのが、これまでで一番オーソドックスな道ですね。しかし、ベルシアから何もあの砂漠の道を通って来なくなると、海からだって来られるわけですね。

三杉 そうですね。だけど問題になるのは、ベルシアの土は八百度を越すと窯の中で崩れるんですよ。だから正倉院のいろんないいものだって、発想は西にあっても中国まで来て工芸が完成され、それが伝わっている。しかしベルシアの影響は磁州窯とかぐらいで、染付は南へ回って中国へ来たのじゃないかと、私は思っているのですが。奈良本 ベルシアに一応の源流を求めてみると言うことは面白いと思いましたね。それより西にはないでしょう。三杉 ないですね。ヨーロッパの陶器は明らかにベルシア系ですね。しかし、昔はヨーロッパの人は自分たちの焼き物がベルシア系だとは言わなかったですね。

奈良本 とくにスペインでそれを感じましたね。

三杉 そうです。ベルシアの陶器がエジプトまで行ってエジプトからイベリア半島を越えてイタリアへ入って行き、さらに北の方へ上って行ったようですね。

奈良本 ニューヨークにスペインの物を集めた素晴らしい

博物館があるんですよ。いいものがありますよ。それを見たときにつくづくこれはベルシアから来たな、と思いましたね。ベルシアの色調があるんですね。

三杉 ヨーロッパの延長とでもいえるメキシコへ行きますと、例えばアズテカの教会なんかでも、真つ青なドームがついていて、キリスト教の教会なのに、メキシコの乾いた風土の中で見ていると、イランのモスクと一緒だ、と感じた。非常に変な気がしますね。

今度の私の『世界の染付』は全六巻の構成で、第一巻が元、第二巻が明初期、第三巻が明後期・清、第四巻が伊万里・李朝・安南、第五巻が西アジア・ヨーロッパ、第六巻が陶片と、ずつと染付を網羅して行くわけです。いかにして染付が世界中に広がって行ったかを追っかけるのですが、もちろんメキシコまで入れました。

奈良本 染付ってのは、かなり温度が高くないといけないのでしょう。コバルト（土青）がちゃんとした色を出すには。

三杉 いえ、そんなことはありません。唐三彩でも八百度そこそこですね。反対に千三百度で焼いても耐えるわけですね、コバルトは。

奈良本 温度が高い方が味が出るのじゃないですか。染付らしくなるのじゃないですか。

三杉 ですから染付という言葉に非常に問題があって、染付というのは磁器の白地に青色の模様のある焼き物のことで、陶器の白と青色の模様は染付ではないかも知れない。

奈良本 そんな感じがしますね。唐三彩ではどうも染付の感じがしない。やはり、元まで降りて来ると、これは染付だという感じがしますね。途中の宋はどうなんです。三杉 宋から染付が作られ始めたことは近年確定して来しました。しかし試作的なもので色も悪い。だんだんと私が調べていて分かって来たのですが、元の染付はアラビア人がつくらせたんですね。

奈良本 ほう、そうですか。

三杉 中国では国家が亡びると焼き物に限らずすべての工芸は悪くなるのですが、にも関わらず宋が亡びても竜泉青磁だけがすごいものをつくるわけです。その頃景德鎮も技術が落ちている。近年の大発見である韓国新安沖発見の沈没船から大きな竜泉青磁がいっぱい出たのですが、どうも南海から中近東にかけ青磁がまずアラビア人によって売られた。ところが、一応マーケットにいっぱいになったので、新製品が必要となり、それが染付だったと私は推定しています。トルコのトプカピの宮殿に三十六点、テヘランで三十六点、それからインドあたりでも元染付が六十数点出て来ている。インドネシアでもフィリピンでもそうですね。ですからアラビア人が少しさびれていたが大量生産のできる景德鎮に注文を出して、優秀な陶工を竜泉青磁からつれて来たり、いいコバルトを彼らもつて来た。だから宋時代からぼつぼつ試作的なものをつくっていたけれど、アラビア人の注文で本格的につくるようになったわけです。だから出来たものはアラビア船に乗せて南海からインド、西方に広げたということです。中国人自身はそのころ青磁とか白磁が好きで、染付はダメだと思っていたらしいですね。

奈良本 アラビア人が景德鎮につくせたとわけですね。三杉 外人が注文してつくらせたものですから外人が全部もつて帰るわけです。中近東の発掘では、カイロのフォスターなど元の染付の大きなグループが出て来るのですが、中国大陸ではそういうのがどこにもない。だから中国の焼き物では元染付だけでなく他にも中国になくて、外国にあるものが多いですね。それほど彼らは外からの注文に対して受け入れ体制があったようですね。

奈良本 その頃から外国人が景德鎮に眼をつけていた。三杉 アラビア人のあとはオランダ人がそれに替わるのですが、あのへんの変化は非常に面白いですね。

奈良本 元の陶器の味に少しよそよそしさがあるのは、外国の注文でつくったからなのでしょうかね。よそよそ

しきというか、急に変って来ますね、宋から元へは。つまり、青磁・白磁の世界からガラッと変わりますね。

三杉 それは中国人が商売として外注品をつくったのだけれど、そのときに中国人自身が本当に元の染付で、いいものができたと喜んだかという、それは分りませんね。

奈良本 それは分らんですね。青磁・白磁の世界から染付へバツと移ったら、ちよつと異質のように思われますよ。しかし、色が鮮やかですね。とってもキレイだな。元の次は明ですね。明はどうなんですか。

三杉 明は磁器に年号を「大明宣徳年製」と宣徳以降入れるようになりますね。ただ、中国陶磁史の教本といえる『陶説』、あれは、清朝の乾隆時代に朱琰という人が記したのですが、この本ができたその頃の清朝で何が一番いいかと言うと、大清康熙年製とか、大清乾隆年製とかという銘が入っているのがいいという観念がありますから、そうすると古いところ大明宣徳年製という名前が入っていると、これが一番いいということになってたようですね。本当は宣徳より前の永楽の方がいいわけですよ。宣徳はほんの十年そこそです。永楽の方が長いんです。永楽の方がいいものを焼いているんですね。その先には元があるわけでしょう。だが、中国の文献の上では、大明宣徳年製がいいと記してある。もちろん宣徳が一番いいんだといった清の乾隆の時点では品物が残っていたわけですね。それは、清朝の人たちが自分たちの時代で銘が入っているものもいいものだという観念で昔をみてしまった。年号が入っているものいいとなると宣徳が一番いいとなる。その前の永楽も元もとんでしまったという気がしますね。

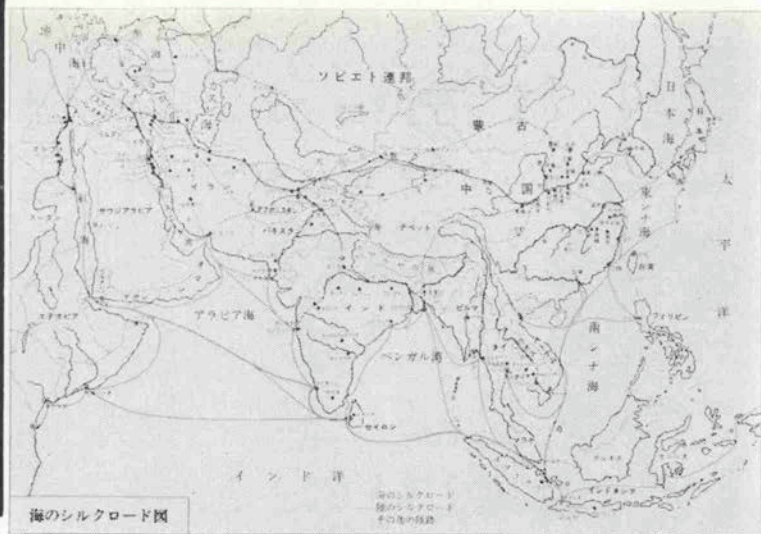
染付の古典は元にある

奈良本 ところで染付に惚れ込まれたのは、どういうきっかけからなんですか。

三杉 私自身、自分で絵を画いていたものだから。焼



染付牡丹唐草文大皿 ペルシア 16世紀前期



海のシルクロード図

き物にも絵が施されていることは楽しいですね。そうすると染付が面白くなる。それと全体の形を写真に入れたりと鑑賞者の眼で見ているわけですが、ディテールを大きくすると景德鎮で絵を画いていた職人と隣合わせに並んで対話しているような気がして、そういう楽しさもありますね。

奈良本 染付というものは、われわれの世界で日常化していて、一番近いですね。家へ帰ると、わが台所で出て来るのがそれですよ。私は今頃の皿や鉢じゃなくてちょっと古いのを使うのです。江戸時代ぐらいのを日常のものとしてですね。全部が染付なんです。なるほど染付はオレたちの生活に密着しているのだな、という気がしません。僕はまず女房を教育しようと思ってね(笑)、皿とか鉢とかを買って来て使わせるんですよ。そうすると今様のものを全部駆逐して行くんですね。いつの間にかわが食卓の上は江戸時代の陶器とか磁器とかで占領されてしまうんです。伊万里が多い、何といっても伊万里が多いですね。次には九谷ですね。その次が瀬戸ぐらい인데。しかし、僕らがひよっと買って日常使うのには伊万里と九谷が多いですよ。

三杉 わが家でもそうですね。焼締(高火度で焼いた無釉の焼き物)ですね、備前焼とかもいいと思うのですが女房子供は、あれは洗にくいとかテーブルに傷がつくとか言ってる。そうすると染付がよくなるんですよ。

奈良本 中国の染付となると清の物が一番多いですね。一番古くて明の呉須手の染付ぐらいでしょうね。

三杉 この間、故宮博物院の陶磁器室の耿先生らが神戸に来られたときに、貿易品に関する文献がないかと聞いたのですが、まったくないと言いますね。だから今までの中国の焼き物の学問に出て来ない輸出品がわれわれの新しい研究のフィールドですね。

奈良本 清朝はあまり研究されてないようですね。

三杉 ヨーロッパやアメリカへ行くと、清朝のことをよく知っていますよ。

奈良本 そうですか。

三杉 これは焼き物のことだけではなくて、僕はよく言うんですが、日本は江戸三百年間、鎖国していたわけですよ。日本人は日本人の感覚で中国の儒教とかを上手に拾ったのですが、その間にヨーロッパではシノアズリー（中国趣味）の流行があって、清朝を肌で知っていたのだけれど、われわれはちょうど鎖国の時代で清朝を知らないのじゃないかな、という気がしますね。

奈良本 古い中国は知っていても新しい中国には興味がなかったのかも分りませんか。

三杉 僕はそういう気がしましてね。それとどんなにりっぱな中国の美術品をもっているコレクターでも日本人のコレクターは、やはり結局日本人ですね。それがアメリカとかヨーロッパへ行くと、アメリカ人やヨーロッパ人なのに何かメンタリティーが中国人みたいな人がいますね。何か中国人と暮らしているみたいですよ。家の中にもいっぱい中国のものを置いたりしていてね。そういう意味での中国趣味は日本にはないみたいですね。

奈良本 昔はあったんでしょうね。江戸時代の学者なんて全部中国名をつけたりしていましたね。荻生徂徠とか頼山陽とかね。

三杉 そのへんをおたずねしたいのですが、それが清朝の中国を理解した日本人であったのか、どうか。

奈良本 要するに日本に合った中国だけでしよう。それに何と言っても一番えらいのは、唐まででしよう、日本がえらいと思っているのは、明以後はつまらない、それほど大したことはないと思ってたのでしよう。豊臣秀吉みたいに兵を出す者もいたぐらいですからね（笑）。本来なら恐れ多くて兵を出せる国ではなかったですからね。

三杉 そのへんに日本人が見ている中国というものは、あの長い歴史の中で日本人に合うところだけをつまみ喰いしたということでしょうね。

焼き物もあの長い歴史の間にいろんなものをつくったのに、日本には日本人に合うものしか入れなかったわけ

です。もちろん日本人はすごい感覚をもっていますからいいものはあるのですが、日本から外へ出ると、日本では聞いたことも見たこともないものがいっぱいあって、それもギトギトしていて、色がキレイでね、ああ、これはかなわんと思うのですが、それがいっぱいあるのでびっくりしますね。ところがヨーロッパ人の知っている中国はこっちの方ですね。

奈良本 僕は元の染付までは好きなんだよね。何か力強いでしょう、非常に。それで以降、明の嘉靖とか萬曆の赤絵とかになるとちよつとついて行けないような気がしますね。

三杉 形式化されて来ますね。そういう意味では染付の古典は元なんだということじゃないかと思えます。

李朝と志野で日本人は死ぬる

奈良本 明以降は小さいものにかえっていいものがありますね。小さい皿とか印肉入れとか、ちよつとした水滴とか、こういうものにはわりと親しみがあるんですよ。

三杉 そういうものは元にはないですね。やや薄手の小さなものならあることはあるのですが。上海の博物館にもありますね。面白いのは蒙古のカラコトの発掘品の中に薄いものがありました。

海のシルクロードの話に戻ると、やはりぶ厚くて大きいものを船で運んでいたわけですね。清朝のもので大きいのが中国やヨーロッパにはあるんですよ。それはわれわれから見たらいかに醜いものであるか。

奈良本 感覚が違うんですね。

三杉 日本人の感覚では小さいものの方がいいんですね。

奈良本 なかなかシャレたものがありますよ。

明末から韓国李朝へ染付が入って来ますね。それで日本の染付は、韓国から来た陶工の李参平が有田ではじめてつくったと言われていますね。

三杉 ただ、これはちゃんとした文献の裏づけが要ると

思うのですが、九州の有田の磁器が全部韓国系であるとは言えないと思うのです。李参平だけじゃなくて、言うなれば揚子江の入口のあたり、浙江省なんかの陶工もやって来ていた。韓国からも中国からも磁器の技術が入って来ているときに明が亡んで清朝になった。そうすると東インド会社が、中国が社会混乱で生産がダメになったから、そのピンチヒッターとして有田に注文をするわけですね。そのちよっと手前に李参平たちがぼちぼちとつくりかけていた。日本の染付はそれ以降のことです。メキシコで地下鉄の工事をしていたら伊万里の破片が出て来た。それは芙蓉手なんですが、中国の芙蓉手が切れてしまったので、日本の伊万里がピンチヒッターで出て来るわけですね。大きな眼で歴史を見ていますと、伊万里はあの方だな、と思うわけですよ。

奈良本 伊万里が盛んになるのはいつ頃ですか。

三杉 李参平が来た直後に東インド会社が大量に注文をするころですね。

奈良本 安南はどうなんですか。

三杉 安南は中国文化圏の傘の下ですね。安南、李朝、伊万里を中国の傘の下の一つと見るのがいいのじゃないかと思えますね。

実は今年、インドネシアのジャワ島北東部のトバン沖で沈没した元の船の積み荷の中から安南染付が出て来んです。うんと初期のものですけど。

奈良本 僕も一つもっているのだけど、トカゲのようなものがついていて実にグロテスクなんだね(笑)。その上に呉須がずつとかかっているんです。その呉須を見ていると、あまりいいものじゃなくボケたような感じですね。

三杉 でも日本人はあんまり真っ白や真っ青じゃなく、ボケている方がいいようですね。

奈良本 李朝にちよっと似ていますね。

三杉 そういう意味では、日本人はきちんとしているよりは少しボケている方がいい。李朝がいいんですよ。李

朝と志野(焼)で日本人は死ぬる、と言うんですよ。

今度のシリーズの李朝篇にも書いたのですが、日本人というのは、ちよっとくずれたものが多い。元の染付とかになると向こうがちゃんとしているので、こっちの方も威儀を正して羽織袴。だけど李朝はボケているから、こっちもリラックスして浴衣掛けて、やあこんにちわ、という感じですね。

韓国の人たちが日常雑器として使っていた飯茶碗を日本人が茶器として大変な価値を与えた。それと向こうの人たちは雑器だと思っている李朝の染付を日本人が非常に高く評価した。だから日本人は二度、韓国人とは全然違う観点で韓国の焼き物を楽しんだという話があるんです。韓国の人たちは高麗青磁がいい、ヨーロッパの人たちも高麗青磁や白磁がいいと言ってますね。そういう意味で日本人の感覚は面白いし、決して悪いとは思いませんけれど、日本人がいいと思っているものと向こうの人が一番大事にしているものとはズレがありますね。世界の染付を研究していますと、そういうズレが浮き上がって来て面白いですね。

奈良本 一種の世界文化史になっちゃうわけだね。

三杉 いわゆる歴史という眼で焼き物を見るのが面白いのか、キレイなものだということで見るのが面白いのか、どちらが面白いのかと思ってみたりするのですが。

奈良本 そりゃ歴史という眼で見たらダメです(笑)。

好きか嫌いかで見ろ。そこからですよ、出発は。歴史学的にどうだというのは本当にも分らないですよ。そうじゃなくて好きか嫌いかを己れの心に問うてみるところから歴史は始まるんですから。よかったらなぜひいのだろう、嫌いだったらなぜひいなんだろう、と。そこを追って行く。なぜボケている方がいいのだろう、と。そこから出発ですよ。決して何か歴史があつて、その次に陶器があり、あるいは、言ってみれば模様があるというのじゃないですね。

(京都ロイヤルホテルにて)